

公開講座記録 (2021 年度)

令和3年度東京学芸大学公開講座【63】「中国古代の青銅器銘文（金文）からみた社会と文化」

講座内容

中国殷周時代の青銅器に記された文字（金文）からは、殷周時代の社会のありかたや当時の文化（言語や宗教、民俗、思想、芸術等）をうかがうことが可能です。本講座では、金文を素材に、当時の社会と文化を考える機会にします。

受講対象者：現職教員、市民、学生

講習料：2,200 円

最小実施人数：8 名

講習会場：東京学芸大学小金井キャンパス南講義棟（S）102 教室

募集期間：2021 年 7 月 26 日～9 月 6 日

実施責任者：下田誠

受講生への連絡事項：コロナウィルスの感染拡大の状況によりオンラインに変わることがあります。

実施日程：2021 年 9 月 27 日（月）

時間：

10 時 00 分～10 時 40 分

金文からみた「国」

講師：下田誠（本学准教授）

10 時 40 分～11 時 20 分

作器者の判断の問題

講師：佐々木研太（本学研究員）

11 時 20 分～12 時 00 分

春秋戦国時代の青銅器流通

講師：山本堯（泉屋博古館）

当日記録

(下田) おはようございます。今日は公開講座におこしいただきまして、ありがとうございます。学芸大学の下田と申します。

最初に本日の講座につきまして、私のほうから簡単に説明いたします。ウェブサイトには書いていますとおりですが、「中国古代の青銅器銘文（金文）からみた社会と文化」と題して、3名の研究者からお話いたします。

講座の内容も書いていますとおりですが、中国の殷周時代の青銅器に記された文字のこと、金文といっていますが、その金文から殷周時代の社会のあり方や、当時の文化、言語や宗教、風俗、思想、芸術、その他についてうかがうことが可能です。本講座では、金文や青銅器といったものを素材に、当時の社会や文化を考える機会にしたいと考えています。

こちらの講座につきまして、最初に私のほうから、「金文に出てくる文字とか社会の実情から国をめぐる問題」について、お話します。そのあと、本学の研究員の佐々木先生から、「作器者の判断の問題」について。最後に、泉屋博古館の山本先生から、講座のスケジュールに「春秋戦国時代の青銅器流通」とありましたが、もう少し幅を広げてお話いただけたと思います。

事前に、配布資料が、私のほうから「金文から見た『国』をめぐる問題」、佐々木先生から「作器者の判断の問題」、山本先生から「青銅器のライフヒストリーと社会」が送付されていると思います。そちらは大丈夫ですか。

朝、メールを送らせていただきまして、西周年表と春秋年表というものを参考までにお送りしておきました（本書では省略）。お手元にあると、聞きやすいかなと思いましたので、何か参考になればと思います。

では、可能な範囲で進めていきます。

金文からみた「国」をめぐる諸問題

(下田) 金文からみた「国」をめぐる問題というのは、重要な問題として、おそらく多くの方から注目されてきたのではないかと思います。ただ、金文の中に本当に「国」というくにかがまえの国の字があるかということ、実は西周金文などにほとんど見当たらないのですね。そのため、その意味では、「金文からみた『国』をめぐる諸問題」というテーマが適切であったのかということ、事後的に少し自分なりに考えるところはあります。「国」という字はふつう旧字体の「國」を使います。この出土資料というか、古い時代の中ではですね。だから、これはあくまで日本の方で簡単な字を使っていますけれども、いわゆる旧字体で、考える方がよろしいと思います。

国とはどういうものかということで、『字訓』『字統』『字通』という辞書があります。著者は白川静さんという方です。この方は、本当に著名な中国学者でして、みなさまもご存じかもしれません。三部作の辞典で大変な業績を上げた方なんですけど、『字訓』のほうはどちらかというと、日本の方の漢字を取り上げているので、中国古典の何かを研究するには『字統』の方を使うべきだと思います。なぜスライドのほうに『字訓』を挙げているかというと、下にある大西克也さんという方が、「国の誕生」という論文を書かれていまして、その中で大西さんが『字訓』の方を取り上げていたので、あえてこちらを持ってきました。とりあえず「国」ってどういう意味かをみるにはよいでしょう。一緒にちょっと見てみますと【スライド2頁】、

これが白川さんの『字訓』に書いてあります。大西さんとは東大の文学部の中国語学の研究者ですが、古い時代の漢字を研究されています。その方は、「金文中に『或』系字が武装都市もしくは都市国家を表す例は存在しない」といっています。これは結構大事なことをいわれていまして、ちなみに私も賛成しています。結論から話しますと、今日皆様と共有できればと思っていることとしては、「或」という昔からある漢字が、国家とか国とイコ

ールではないのではないかとということ。逆にいうと、今まで多くの人は「或」という金文の字が出てきたら、「国です」と置きかえる方が一般的だと思います。ただ、大西先生とか佐藤信弥先生とか、私もですけど、或とは、いわゆる国家とか国とかに相当しない。ではどういう意味なのかというのは、この後出てきますけれども、そのあたりを確認しておきたいと思います。それで、甲骨文字には「或」という字がないのではないかと、金文とは、だいたい殷代とか周代とかいわれている先秦時代、また戦国時代と、青銅器の文字がありますけど、甲骨文字には「或」という字、もっといえば「国」なんて字はないわけです。だから白川さんの解説は適当ではないのではないかとというのが大西さんの説といえます。白川説が批判されるようなところかどうかはありますが、少なくともこの解説についてこういう考え方があるということです。

代表的な昔の辞書について、漢字の研究をどうやってやるかといいますと、『説文解字』という後漢時代の許慎という人が、最古の辞書みたいなものを作ったとされています。では、その中の国という字を見てみますと、こう書いてあります【スライド3頁】。「國は邦なり、口に従い或に従い」と書いてあります。「～したがいい」というのは、漢字の構成を示しています。「國」という字は口と或でできているといっている感じで、意味は「邦」だといっています。「國は邦だ」と許慎はいつているのですが、次のところをみると、「邦は國である」と書いてあるのです【スライド4頁】。これは解説になっていないではないかと思うのですが、相互にいつています。これではあまりわからないわけですけども、字形の解説はきちんとされているわけですね、「邑に従い丰の聲」だということで、漢字のつくりについていえば、これは部品と音が組み合わさっていますから形声字ですね。戦国時代以前の文字について、古文や籀文でこう書きますということで、書いてくれているものもあります。「邦」という現代の楷書の下に、少し変わった字がありますけれども、これは篆書といわれる文字です。

白川静の『字統』をみますと、『字訓』より中国側の字源をみるにはこちらの方が適当だと思いますけど、そちらにはだいたい同じようなことが書いてあります【スライド5頁】。ただ『周礼』という資料が補足されていて、『周礼』というのは、中国の都城のデザイン、都市設計、制度設計等が理念的に書かれている史料ですけど、少し後ろの時代の考えなどが書かれています。それをみると「大なるを邦といい、小なるを國という」と書かれているんですね。これは鄭玄という人の注ですが、これは後漢の、さきほどの許慎と同じ時代の人です。次に『玉篇』という史料をみると、今度は逆さまになっていて、「小なるを邦といい、大なるを國という」とだいぶ無責任な感じです。このような状態でなかなか難しいわけです。

金文の例をこの後みるのですが、「四或、南或、内或など、国の字に或を用い、西周後期以後に至って王國・下國のように國を用い、あるいはこういった字を作る」と書いてある。そのため、さきほど少し申し上げたように、一般的には或という字があったら、国と解釈されるということ自体は、一般的なことで、金文をみたら四或などと書いてあるということですね。これをのちの研究者たちは、四国、南国、内国というように国という意味と解釈したということです。

「国家は古くは邦家といい、王家と邦とは同一のものであった」とか「国都に軍政の中心が移ってから国家という」といったような説明もついています。

さきほど、「或」という字が國ではないのではないかと、国家ではないのではないかとというのが一つなんですけど、もう一つ、これは一般に理解されていることなのですが、戸川芳郎氏の『全訳漢字海』に書いてある赤字のところ、「漢代、劉邦の諱を避けた」ということです。これはご記憶にとどめておくとうろしいのではないかと思います。要するに、戦国までは「邦」の字を使っていたということなのです。もともとは國とか國家とかという意味の漢字は劉邦の邦の字だったのだろうということ。金文にも「邦」という字が見られるのですね。このことを避諱（ひき）といい、漢代には皇帝の名前を使つてはいけないんですね、恐れ多くて。それで、漢字をわざわざ変えなくてはいけないということで、だからもし劉邦がいなかったら、今も国家ではなくて「邦家」とか、

国ではなくて「邦」といっていたかもしれませんが（笑）。劉邦の諱を避けて「國（国）」という字が使われるようになったのですね。漢和辞典は書店にいくと、ふつう三社くらい売っていて、いずれも特色があると思います。その中でも、この『全訳漢字海』は比較的好く使用されているのではないかと思います。

さきほどの「邦」ですが、劉邦の「邦」字はどういう意味なのかということなのですが【スライド6頁】。『説文解字』とはこういう例が多いので、いろいろな注釈書を活用します。そして赤字の部分、「金文の字形は、丰の部分に土主と若木の形に作り、封樹の意を示し、傍らに邑を加える」とあります。これは、何か植えるってことですかね、そういう字だということです。それで、「邦は封建によって作られたくに、国は武装した城邑を言う」ということですね。このあたりのことは、のちの時代のことも出てくるかもしれないですし、さきほど申し上げたように、「國」という字自体が西周期に出てこない、だから本当に「或」は武装した城邑なのかっていうのは、少しわからない、だから、その辺りは白川さんの説がどれくらい妥当するか、どの時代に妥当するか、ややわからない部分ではあります。ただ、一つ申し上げたいのは、要するに、植えるってということなのです。自分の範囲はここまでだというときに、木等を植えるという感じですかね。そうすると、そこまでが自分の範囲だということを示しているということだと思うのですね。

新しい研究者もみていく必要があるだろうと思ひまして、立命館大学に白川静記念東洋文字文化研究所ができて、甲骨や金文の研究者が集まって、落合淳思さんという方、甲骨の専門家ですが、その方の説明をみると、だいたい同じようなことが書いてありますね【スライド7頁】。『甲骨文字辞典』になるのですが、上古音の方を書かれているのは非常に工夫されています。上古音というのは、古い時代の音です。上古音、中古音といいます。上古音というのは『詩経』という本から復元したりしていますけど。しかし、甲骨に上古音とは本当はどうでしょう、甲骨の音というのは基本的にはわかりようがないと思います。でも、白川さんの辞書の弱点というほどではないのですが、白川さんの辞書には中国語の音を書いていないのです。ふつうの漢和辞典は参考情報として、必ず現代中国語の音とか、上古音、中古音に関する情報が出ています。ところが、白川さんの『字統』等をみても、中国語の音は出ていないのです。だから、白川さんは、徹底的に字形から研究された方で、逆にいえば、音を主にやっている人もいます。そうすると、なかなかかみ合わないのですけれど、落合さんは次の世代の方なので、そういったことも配慮して、音も書いている、そこは落合さんの工夫だと思います。意味は「土盛りに植物を加えた形であり、初文は「丰（ほう）」である。当時は境界に植物を植えたため、領域の意味として「封」や「邦」の字義となった」とあります。だから、「封建する」という「封」の字も、劉邦の「邦」の字もだいたい通じるというか、そのように考えられています。それで、この字にはまだ甲骨の時には、「邑（い）」の字がついていないのですね。ここが少しポイントかなと思います。この「邑」の字は画期的で、甲骨段階の「邦」字にはまだ「邑」はついていないのです。「邦」字の左側（偏）しかないです。

後10分くらいなので、少しずつまとめていきますけれど【スライド8頁】、「ワク・ヨク・コク・イキ・くに・あるいは・うたがう」と、『字統』によりますと「或」という字にはこのように書いてあります。白川さんも当然「或」のことも書いていまして、これが「國」の元の字だといっています。そして、「四或」「中或」とか、そういったことが書いていて、「宗周鐘」という資料に「四或」というのが出てきますと、毛公鼎にも「四或を康（やす）んじ能（おさ）む」等と書いてあります。

「邑」という字も白川さんを持ってきたのですが【スライド9頁】、『説文解字』をみたら、「邑は國である、邦も國である」と書いてありました。では「邦」と「邑」になんの違いがあるのかなというのを少しみたのですが、「邑」という字は、皆さんにとってあまりなじみがないですね。なじみのない字について今いっているかもしれないのですが、実はわれわれ古代中国を研究している者にとっては、この「邑」という字は大変大事にしています。これはほとんど今使わないかもしれないのですが、「邑」の字は「おおざと」になりますね。

この邑の字は、「口（い）と巴（は）とに従う」とあります。「口は都邑の外郭、城壁をめぐるしている形。巴は「卩（せつ）が本形で、人が跪坐する形。城中に人のあることを示し、城邑・都邑をいう」ということなのですね。甲骨にも「邑」は出てきます。「大邑」・「小邑」という形で出てきます。それで、『詩経』にも「商邑、翼翼たり」と出てきます。そのほか「新邑」「大邑」とかという言葉もあって、やはり「邑」という文字も、当時は何かの単位になっていたのではないかということがわかります。だから、今の時代と、孔子とかが生きていたもつと前の時代というのは、だいぶ違うということです。その時は、国家とか国とかというよりは、「邑」や「邦」とか、そういったものが、なんとなく今「国」といわれているものに近い意味で使われていた可能性があるということですね。

大孟鼎【スライド10頁】というもののの中に、「珷（武）王に在りて、玟（文）を嗣ぎて邦を作（おこ）したまえり」という風にありますね。これで要は、国を作るということですね。「厥（そ）の匿（とく）を闢き、四方を匍有し、その民を峻正したまえり」という風にありますけど、四方を保ったというようなことが書かれています。毛公鼎というのは【スライド11】、一番長い金文が書かれているのですが、ここにも「廼（これ）我が或を喪うこと唯（あ）らん」とありますね。この「或」は「国」と読んでもよいのでないかと、大西さんはおっしゃっていて、金文中で唯一これは「国」と読んでもいいかなといわれていましたけれども（451頁）、しかしやはりこれは地域の「域」で読んだ方がいいんじゃないか、と。だからこういうのも、「我が或」と書いてあると、皆すぐに「我が国」だと思っていたのですが、これも「国」ではなく、地域の「域」で読んだ方がいいのではないかというのが大西さんの説であります。だから、「国」はどちらかというと、「我が邦」の「邦」、こちらの方を「国」と考えた方がいいんじゃないかということです。

言葉の整理をしていくときに、もう少し違う視点からと思うのですが、意味論と語用論ということが言語学ではありまして、そういったように区別をしているのですね、そのようにみていった方がいいんじゃないかと【スライド12】。ラングとパロールという視点があって、ソシュールという人がいますけれども、意味論というのは、コンテクストから離れた語や文の意味を扱う、と。語用論では具体的な発話の場面における意味を考察するといっています。【以下、スライド13～21】或、邦、邑ということで、この「或」には東或、南或、中或、これだけみても、東域、南域、中域でもいいかなと思うのですが、これ今までは東国、南国、中国といていたのですね。それで、「邦」の方の用例を見ると、周邦、井邦、万邦。「邑」の方は、大邑商、邑人、新邑といった用例があるということで。では「邦」と「邑」の違いは何かというと、「邦は樹木を植えて範囲を示す。ただし、邑と結合し、土地と人が組み合わさった。具体的な数詞を加えられる」という特徴がある、と。「邑」の方は、「居住実態があり、数戸から数百戸にも使える」、だから大きい国ではなくても、もっと小さな村単位に対してもこの「邑」というのは使える、と。また「部族や城郭の単位にもなりうる」と。

だから、時間もないので、このあたりの用例はさきほどの辞書と同じ、後でお時間があつたらみていただきたいのですが【スライド23】、これを「邑制国家」という人がいるのですね。皆さんどうイメージされているかわからないのですが、もしかしたら殷という大きな国家があって、周という大きな国家があって、秦という大きな国家があって、漢という大きな国家があって、という風に思ってしまうかもしれません。それは私たちが今、中華人民共和国を知っている、それが昔にも殷があつて周があつて、と思うかもしれないのですが、実はあの周の下に何百かの小さな国、つまり「邑」があつて、そして、その小さな「邑」が、私たちが今でいう「国」、「国家」だから「邑制国家」といっている。その中の一番大きいやつが周、何かもう考え方が大転換するのですが、この考え方が正しいかどうかはまだわからない。比較的有力な考えなのかもしれませんが、周という大きな国家があつて、その下にたくさんの小さな領域があるというよりは、小さな邑のまとまりの中で、一番大きなまとまりが周かな、というのが邑制国家論。ただ、邑制国家論も一つ弱点というか、考えないといけ

ないのは、そうはいっても、封建制度、自分の一族ですよ、自分のお兄さん、自分のお兄さんの息子だとか、そういった一族をあちこちに派遣して、封建しているのです。血の紐帯というか、その血の紐帯によってばらばらした国、邑たちを手懐けるというか、結び付けている。だから、そちらの方に目を向ければ、巨大な周があるようにみえるし、でももともとばらばらしているので、血の紐帯といっても、世代を重ねていくとどんどん離れていってしまいますから、その辺のどこにフォーカスするかによって、変わってくるかなとは思いますがね。

もう終わりにしますが、その後のキングダムといわれている戦国時代、秦の始皇帝とは紀元前 221 年ですが、そのころまでに大きな変化があったと考えられています【スライド 22】。では、西周時代から秦の始皇帝時代までに何があったのか、たぶんその間に、西周時代にはできなかったことが、たぶんできるようになったんだらうなという風に思っています。それを明らかにしなければいけないのですが、きっと交通にかかわり道路とか、移動手段とかに革新があったのでしょし、生産の革命もあったかもしれない。また、貨幣が使われるようになったとか、商業的な変化があったかもしれないし、戦争も、西周・春秋時代は一日で戦争が終わるというのですね。結構盛大な戦争があったと書いてあるのですが、翌日には終わったって書いてあったりするのですね。それが戦国時代には何十日、一年、二年とか、何十万っていう大戦争になっていくんですね。そうすると、やはり戦争の仕方とか、武器とか、組織形態も変わっていった。きっと統治の仕方も変わったと思うのです。血のつながりで封建していたくらいしか方法がなかったものが、もっと違うマネジメントの仕方が生み出された。最後にはやはり、もしかしたらこれが最初なのかもしれませんが、人間の認識、考え方ですよ、もうだいぶ根本的に変わってしまっている可能性があります。なぜなら、800 年もありますからね。紀元前 1050 年から前 221 年までとは、800 年もあって、一言でいえば、西周から秦の始皇帝といっていますけど、この 800 年間で本当に大きな変化があったんじゃないかと思っています。

ではこのくらいにさせていただいて、佐々木先生の方にバトンタッチしたいと思います。どうもありがとうございました。

作器者の判断の問題

(佐々木) みなさんおはようございます。学芸大学個人研究員の佐々木です。

この「作器者の判断の問題」というタイトルは、来年度の公開講座でどんな話をしようかと下田先生と話をしている中で、下田先生がつけてくださったタイトルです。作器者というのは、その青銅器を作った人のことです。作ったといっても、自分で作るわけではなくて、作らせるのですが、例えば織田信長が安土城を築城したといっても、「織田信長が自分で建てたわけじゃない」というようなことを言う人がいるので一応ことわっておきます。実際は、信長が普請奉行に命じ、普請奉行が大工に命じて築かせたのですが、このように誰が作らせたのか判断できる銘文のある青銅器の場合、作った人物の名を冠して青銅器の名称としています。今日は、最近出土した青銅器を例にとって、今この青銅器はこのように呼ばれているけれども、本当にその呼び名でいいのだろうか、というようなことを、作器者を判断するという作業を通じて再検討します。その過程で、当時の社会はどのようなものであったか、当然そういったことも考えざるを得ないわけで、今日は当時の儀礼の一つを取りあげることにしたいと思います。

お手元にある資料に、銘文のある青銅器にどのように名前を付けるのか、ということを示してあるので、まずはそれをお読みください。これは京都の泉屋博古館に行くとおいてあるリーフレットです。名誉館長の小南一郎

先生がお書きになったもので、その中から、今日の話に関係ある部分を抜き出しました。銘文のある青銅器の名称は、その銘文に基づいてつけるということを、これを読んで理解していただきたいと思います。

ここに抜き出した3つのルールで、青銅器に名称を付けることになっているのですから、今後みなさんが博物館や美術館で青銅器をご覧になる場合に、青銅器の名称となった情報が銘文中のどこにあるのかといったことを意識して観ていただけるといいと思います。【資料1】をご覧ください。泉屋博古館が所蔵している青銅器の一つ、「泉殷」です。なぜこれを「泉殷」と名付けたのかということを、確認しておこうと思います。まずは器の種類を定める必要があります。器の名が銘文中に書いてあることがあります。この銘文がそうで、「寶鬲殷を作る」とあり、殷という器を作ったということです。でも、銘文にそう書いてあるからといって、本当に殷という器かどうか確認しなければなりません。器の写真をみると、これは殷という器に分類する形なので、名称も「〇〇殷」としていいわけです。次に、この器を作った人物、作器者は誰なのかということを判断しなければならないのですが、銘文中に出てくる人名をすべてピックアップすると、今回は「伯雍父」と「泉」の二人です。この二人しか銘文に出てこないの、2分の1の確率で「伯雍父殷」か「泉殷」かのどちらかということになります。先ほど見ていただいた泉屋博古館の資料に、「銘文の基本的な内容は、これこれの事があって、それを記念するために、Aという人物がBという人物の祭祀に用いる青銅器を作ったというものである。そうした銘文の中のAという人物が作器者と呼ばれる」とありましたが、この銘文には誰が「寶鬲殷を作った」のかを明記していないので、Aという人物はわかりません。このように誰が作ったのか明記していない銘文の場合、誰を作器者と考えればいいのか。ここで注目してほしいのが、「対揚」という語です。

対揚とは、ある人物からの恩寵に感謝の気持ちを表すことで、この二字の熟語として銘文に出てくる場合もあれば、「対」だけ「揚」だけということもありますが、意味は同じだと考えてかまいません。「対」「揚」の場合は「こたふ」と読みます。「対揚」「対」「揚」の主語がわかれば、その主語が作器者であるということです。そういった視点で泉殷の銘文をもう一度見直すと、対揚した人物、これも残念ながら主語として示されていません。でも、対揚した相手が伯であることはわかります。対揚の後に「伯」とある、言い換えれば対揚の目的語が「伯」であるからです。先ほど言ったように、伯雍父と泉の二人の人物しか出てこない銘文の中で、対揚した相手が伯、すなわち伯雍父であるならば、対揚した人物は泉であると考えて間違いありません。ですから、この青銅器は殷であり、これを作った（作らせた）人物は泉であるということで、泉殷と名づけて泉屋博古館に展示されているのです。

このようにして銘文のある青銅器に名前をつけているのですが、ここで例題をご覧ください。「佳王奉于宗周。王姜使叔事于大僕。賞叔郁鬯・白金・趨牛。叔対大僕休、用作寶尊敬彝」という銘文のある青銅器に名前をつけるとしたら何と名づけたらいいだろうかということです。まず、この青銅器の種類を判断しなければなりません。銘文に「寶尊彝を作る」とあるので、彝と考えればいいのかと思うかもしれませんが、ここにいう「彝」とは青銅容器の総称であって、この器そのものの種類を言うものではありません。そこで、【資料2】をよく見ると、どうやらこの器は卣と考えてよさそうです。ですから「〇〇卣」と名づけなければならないということです。次に、この銘文の中から、誰がこの器を作った（作らせた）人物かということを考えるとき、この銘文は少し難しく、登場人物が四人います。「王」「王姜」「叔」「大僕」の四人です。この四人のうち誰を作器者と判断すればよいか。やはり「寶尊彝を作る」の主語はありません。したがって対揚しているのは誰かと考えると、この銘文では対揚の前に主語があります。叔が大僕に対揚した、と主語を明示しています。ですから、これは叔さんが作った（作らせた）器だと判断して、「叔卣」と名づければよいということになります。事実、この青銅器を所蔵している北京の故宫博物院が『故宫青銅器』という本を出版していて、その中で「叔卣」という名称で紹介されています。ところがどういうわけか、私たちが金文を研究するときの基本テキストである『殷周金文集成』には「叔

殷」という名称で登録されています。『殷周金文集成』の編纂者は、この器を卣ではなく殷と判断したのでしょう。私は「叔卣」を正解としましたが、いや殷のほうが適当であるということなのかもしれません。そのあたりについては、もし時間があれば、山本先生にお話いただきたいと思います。珍しい器形で、その種類を判断するのが難しいと言う研究者もいるようですから、私のように簡単に卣と考えるのは適切でないのかもしれません。

ともかく、ここまでの話で理解しておいてほしいのは、対揚する相手と、恩賞を与えた人物とは同じ人物である場合が多いということです。例題の銘文でも、叔に賞した、すなわち何らかの褒美を叔に与えたのは大僕であると考えたほうがいいということです。そうすると、いま言ったように叔が感謝の気持ちを表している人物と、叔に恩賞を与えた人物とは、ともに大僕という同じ人物であるということです。このことをまずきちんと押さえておいてください。そのうえで、以下には、このような視点ではうまく説明できない銘文をもつ青銅器を見ていこうと思います。

それでは【資料3】をご覧ください。2014年に陝西省岐山県京当鎮賀家村北西区（周原遺跡）で発掘された西周墓のうち11号とナンバリングされた墓から出土した、いわゆる昔雞殷という青銅器（同銘の2器）の器名について、命名の過程を追体験することにしましょう。11号墓の年代は、出土品から考えると、西周早期のおわりから西周中期のはじめにかけてのころだそうです。

資料に挙げたように同じ銘文を持つ器が二つ出てきています。たしかに銘文は同じなのですが、二つを見比べてみると、左のほうは字画を失っている文字が非常に多く、うまく作れなかったということがわかります。こういう現象が起きる理由もいろいろと指摘されています。時間が許せば山本先生に説明してもらいたいと思います。

今回注目する「賓」という字が、左の青銅器では流れてしまってまったく残っていません。ですから、出来栄はいい右の銘文「王姁呼昔雞遑葬姑于韓。韓侯賓用貝・馬。敢揚王休、用作尊彝」で考えていこうと思います。銘文は「尊彝を作る」となっていますが、先ほども言ったように彝は容器の総称なので、この器そのものは「昔雞殷」という通称のとおり「殷」で間違いありません。問題は、本当に昔雞さんが作った（作らせた）器と判断していいのだろうかということなのですが、この銘文にも人名がたくさん出てきます。「王姁」「昔雞」「葬姑じょうこ」「韓侯」の四人です。王姁というのは周王のお后ですが、その周王が成王なのか康王なのか昭王なのか、よくわかりません。葬姑というのは、姑という姓の葬という国の女性です。この女性が、周王室から韓に嫁入りした女性だという説と、反対に韓から周王室に嫁入りしたのだという説とがあります。今回はそこに深入りしません。韓侯というのは、見てのとおり韓というところのお殿さまです。

この銘文の「呼」はただ呼ぶということではなく、何かをさせるために呼んだ、すなわち使役の用法で読みます。「于」は英語の前置詞のような働きして、韓という国で「に」に「害」という動詞の表す行為を行わせるということです。つまり、この銘文はざっと、

- ・周王のお后である王姁が昔雞に命じて葬姑を韓で（あるいは韓に）どうにかさせた
- ・韓侯が貝と馬とで「賓」した
- ・王の賜物に感謝を表してこの器を作った

という内容です。

今の話を確認すると、命令したのは王姁、命を受けたのが昔雞です。それがどのような命令かということ、葬姑を韓で（あるいは韓に）どうにかする、ということです。また、誰を「賓」したのかはわかりませんが、韓侯が貝と馬とで「賓」したことは明かです。対揚した人物（主語）もわかりませんが、感謝の意を表した相手が王であることはわかります。「作尊彝」とあるだけで、誰がこれを作ったのかもわかりません。分からないことがたくさんある銘文です。このように分からないことだらけの銘文なので、誰が器を作ったのかを判断するのもちょっと難しい銘文です。

この銘文では、韓侯が貝と馬とで「賓」しているのに、感謝の気持ちを表す対象が韓侯ではなく王であることに注意してください。この「賓」とはどのようなものかという点、それが動詞の場合、おおよそ「王室の使者など、明らかに上位にある者から特定の任務や職務を任せられた者が、赴任先でその任務や職務を果たしたときに、使者を派遣された国がその使者をもてなしたり、その使者に謝礼として物品を贈ったりする儀礼」のことです。ですから、恩賞を与えるという意味の「賞」や「賜」とは区別して考える必要があります。韓侯が「賓」の主語であるのは、銘文から明らかなことなので、韓侯が「賓」した相手を考えると、王姫の命を受け、韓の国で何らかの任につき、その任を果たした昔雞のほかには考えられません。つまり、韓侯がもてなしたのは昔雞であるということです。

では、昔雞が韓でどのような任務をやり遂げたのか、昔雞は王姫からどのようなことを命じられたのか。それを示すのが「𠂔」に「害」という字で、何らかの政治的な行為であったろうと思いますが、具体的な中身については諸説紛々で、どの説が最も妥当なのかよくわかりません。ただ、それは、韓侯にとって、あるいは韓という国にとって、非常にありがたいものであった、名誉なことであったはずで。

このように銘文を少しずつ読み解いていっても、王に対して感謝の気持ちを表した（対揚した）人物を特定しないと、器名を確定できないはずなのに、どうしてこの器を「昔雞殷」と名づけたのかという点、それは、同じ墓からこの器とともに、昔雞の作った器が出土しているからです。【資料4】をご覧ください。その銘文に「隹三月乙酉、異伯賜昔雞貝、用対異伯休、用作父丁尊彝」とあって、やはり「作父丁尊彝」の主語はありませんが、「対異伯休」とあるので、この銘文で異伯に感謝の意を表しているのは、異伯から褒美として貝を与えられた昔雞のほかにはあり得ません。さきほどお話したように、「対」の主語が昔雞であるということは、この器を作ったのも昔雞であるということです。このように昔雞が作器者であることの明白な器が同じ墓から出土しているので、殷の作器者も銘文中にその名が現れる昔雞であると考えerわけですが。しかし、そういった情報を抜きにして、銘文だけからこの器を本当に昔雞が作らせたものと判断できるかという点、これはなかなか難しいと思います。

もし昔雞が王に感謝の気持ちを表しているとしても、王姫は昔雞にある指示をしているだけで、褒美をとらせたというようなことは書いてありません。ただ、王姫から命を受けたそのこと自体がありがたいこと、恩賞なのだと考えることももちろんあって、その場合は【資料5】の小臣守殷の銘文に「休令」とあるように、命令そのものに感謝の気持ちを表すということをはっきり書きます。そのような例にはたくさんのバリエーションがあります。でも、いま私たちが検討している殷の銘文にはこの「令」という漢字がありません。ですから、銘文の文言からすれば、この殷を作った人物は王姫の命令をありがたい、だから感謝の気持ちを表そうと思っていたわけではない、ということになります。

もっとも、「賓」のことを記す銘文では、「賞」や「賜」という恩賞を表す動詞の場合と違って、「賓」した人物が対揚の対象となることはなく、多くは「賓」にあずかる機会を与えた人物（王や王后）に対して感謝の気持ちを表すという文構造になっています。ですから、昔雞が韓侯の「賓」にあずかる機会を得たのは王姫の命のおかげなので、昔雞は「揚王休」と王室そのものに感謝の意を表したのだ、と考えることもできそうです。そこで注目してほしいのが【資料6】の芮殷の銘文です。芮殷の銘文では、ありがたいことに、動作の主語がすべて示されています。うっとうしいくらい主語を示した意図をよくよく考えると、その動作が誰の動作なのかをきちんと示したかった、そういう意図で銘文を起草したのだらうと想像できます。すなわち、命じたのは王である、「賓」したのは自黄であり呉姫である、対揚したのは芮である、ということを示すために主語を明記した、というように考えられるのです。こうした意識で「賓」のことを記した金文をあらためて見直すと、「対揚」の語をともしない場合、誰が対揚したのかがわかる、つまり対揚の主語を明記することのほうが多く、対揚の主語がない銘文は、この殷の銘文と、伝世器の作冊鬲匚くらいしか見当たりません。

ということは、この殷や作冊鬲卣では、あえて対揚の主語を示す必要がなかった、と考えることもできます。あえて主語を示さなくても文意は明らかであるという視点で殷の銘文を見直すと、「賓」の主語である韓侯が、つづく「揚」「作」の主語でもあるように読めます。であれば、韓侯が王に感謝の気持ちを表す理由は何かを考えなければなりません。字義はよくわからないけれども、「𠂔」に「害」という動詞は、先ほどお話したように、韓という国にとって、あるいは韓侯にとって、ありがたいことであった、それで周王室から受けた恩恵に感謝を表すというのが、銘文の「敢へて王休に揚_ふ」という表現なのであると考えれば、王に感謝の気持ちを表しているのは韓侯なのですから、この殷を世間では昔雞殷と呼んでいるけれども、そうではなくて“韓侯殷”と呼ぶべきではないかとなります。

そうすると、ここで疑問が生じます。先ほど確認したように、明らかに昔雞が作った器と同じ墓の中から、韓侯の作った器が出土するのはおかしいじゃないか、となるわけです。この当然の疑問について、私は次のように考えています。——韓侯の立場で銘文を起草し、韓侯の依頼で周王室の工房で二つセットの殷という器を作った。韓侯は昔雞のおかげで周王室から恩恵を得たので、作った殷を昔雞にプレゼントすることにした。はじめ左側の銘文の器をプレゼントしたのだけれど、これは文字も欠けていて不完全である、もしかしたら昔雞のほうが「こんなのは嫌だ」と言ったのかもしれませんが、とにかく、きちんとできている右側の銘文の器も贈った。だから二つとも昔雞の所有になった。昔雞が亡くなった時に、昔雞がみずから作らせた器とともに手元にあったこの二つの殷も一緒に墓に埋葬した。一緒に墓の中に埋めてしまったばかりに、本当は韓侯が作った器なのに昔雞殷と呼ばれることになってしまった——。こんなふうに私は想像しています。

これはあくまでも、銘文の文面上そのように読めるのではないかということであって、「𠂔」に「害」という漢字がどういった行為を意味するのかということを明確にしない限り、本当に韓侯にとって、あるいは韓という国にとって、それがありがたいことであったのか、名誉なことであったのか、なぜ韓侯は王に感謝の気持ちを表したのかを確定することができません。「𠂔」に「害」という構造の字は、この銘文に初めて出てきた字なので、みなさんもその字義についていろいろと想像をめぐらせてみてください。

以上のように「𠂔」に「害」という文字の意味がよくわからないまま、ともかくも「王姁呼昔雞遣葬姑于韓。韓侯賓用貝・馬。敢揚王休、用作尊彝」という銘文を素直な気持ちで読むと、どうやらこれまでの昔雞殷という呼称よりも、韓侯殷のほうがよいのではないかというのが現時点での私の判断であるということで、お話を終えたいと思います。ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました。

参考文献

- ①近藤聖史「成周の庶殷について—賜與形式金文の分析を中心として—」『立命館文学』第589号、2005年
- ②李彦峰・孫慶偉・宋江寧「陝西宝鸡市周原遺址2014～2015年の勘探与発掘」『考古』2016年第7期
- ③黄益飛「略論昔雞簋銘文」『中国国家博物館館刊』2018年第3期
- ④王暉・姜春萌「周原出土昔雞銅器与昔氏分封諸問題考証」『寧夏社会科学』2021年第1期

青銅器のライフヒストリーと社会

(山本) よろしくお願ひします。山本と申します。初めての方もいらっしゃるんですが、以前からですね、下田先生と佐々木先生とこの公開講座というものをやらせていただいております、今回何回目ですか、4、5回目くらいになるんですかね、それくらいになります。以前は青銅器の可愛さについて熱弁を振るった記憶があるんですけども、たまにはまじめな研究をしているんだぞということで話をしようと思ひまして、今回はこんなタイトルをつけております。「青銅器のライフヒストリーと社会」ということで、「ライフヒストリー」という言葉はみなさんにあまりなじみのない言葉かもしれませんが、今回公開講座でお話いただいている下田先生と佐々木先生は文献史学の専門家でいらっしゃいます。それに対して私は、文献史学の専門ではなく、考古学なんですね。考古学を専門としていますので、考古学の立場から、この殷周青銅器をとらえてですね、そこからどう社会を捉えていくかということなんですから、そういうときに、この「ライフヒストリー」というものに最近私は関心があつて、そこを糸口にいろいろ新しいことが言えるんじゃないかなと思ひながら研究をやったりとか、していこうというわけです。

今日は資料をお配りしてまして、A4 版 4 ページ分お配りしておりますけど、その内容にしたがってお話していこうと思ひます。画面に出しているパワーポイントはですね、それを簡単にまとめたものですので、基本的に内容は同じだと思ひてください。

考古学を説明するときによく言うんですけど、モノを扱う学問だという風に言うんですね。歴史学、考古学ともに、人類の過去を研究するということは一緒なんですけども、何が違うのかというと、方法論が違ふんですね。文献史学というのは、基本的に文字がある時代っていうのを扱うのが歴史学なんですけども、考古学はそうではなくて、人類が残した物質資料を扱う、それをよくカタカナで「モノ」という風に言ひます。我々はよく「モノを見ろ」とかという風にしつこく言うんですけども、人類が残した物質資料を観察することによって、それが生み出された社会を見ていくというのが考古学の手法になります。一口に「モノ」と言ってもいろんなモノがありますね。我々の周りを見ても、いろんなモノにあふれているという風にいうことができると思ひますけども、「ライフヒストリー」という言葉を出しましたけれども、僕らの周りにあるモノというのは、作られて、それが流通して最終的には人に使われて、最後廃棄されるという、いうなれば人の一生みたいなものが実はモノにもあつて、まあモノの一生という風に言えるかもしれませんが、そういう観点で考古学というのはモノを見ることがあるんですね。で、今回お話する青銅器というのも、いろんな種類のモノのうちの一つであつて、青銅器にもやはりこのライフヒストリーというものがあると。ま、これがあの社会を考えていくときの重要な手掛かりになると。まあ、プリントの方に少し例として出しましたけれども、私たちは 21 世紀に生きているわけですから、じゃあ私たちの身の回りにあるモノって全部 21 世紀にできたのかというとそんなことはないですね。例えばこのアンティーク家具であつたりとか調度品という例を出しましたけれども、非常に古くから伝わるもの、つまり生産されてからかなり時間が経っているものというのが、今の我々の生活空間におかれるというのは、別に珍しくないわけです。それは、作られ方というのかなり特殊で、オーダーメイドという形で作られて、本当に使用者のもとに流通した後もずっと補修を繰り返しながら使われ続けていくというのが珍しくないわけで、そうすると非常に長い間時間をかけて廃棄まで時間がかかるというのはあるわけです。いうなれば私今美術館に勤めていますけれども、美術品なんてものも一種そういうもんですよ。古くから伝来しているものが今も残っている。一方、ポケットティッシュなんてもんがありますけど、これ何十年も前のポケットティッシュを何年も何年も大事にとって使っている人という人はまあいないと思ひますね。というのは、このポケットティッシュというのは、工場で大量生産されて、使う人のもとに流通されるとすぐに使われて捨てられるというわけですね。となると、さっき出てきたアンティーク家具とはライフヒストリーがだいぶ違うというわけなんですね。ところ

が、紙、というかティッシュが短いサイクルで廃棄まで向かっていくわけなんですけども、それが過去もずっとそうだったかというそれは違うわけです。例えば一千年前、中世なんかというのは、紙が非常に貴重だったので、紙はすぐに捨てられないわけですね。だから例えば、中世の文書なんか調査すると、表にいろいろかいてあるんだけど、裏にもびっしり文字が書いてあるということが非常によくあるわけで、それは紙がもったいないので、表面だけ書いて捨てるというのはもったいないですよ。だから裏面もちゃんと使おうとなっていたわけです。ですからティッシュと文書って性格は違いますけども、紙ということに着目するならば、過去と現在でライフヒストリーが全然違ってるわけなんです。その変化というのが社会の変化を表しているという風に言ってもいいというわけなんです。そういう風に「モノ」と書きましても、文字資料とはちょっと違う観点で当時の社会というのを見ていこうというのが、このお話の趣旨でございます。

今回お話しするのは青銅器のお話なんですけども、やはり青銅器にもライフヒストリーというものがあります。ここには簡単にまとめたものがありますけれども、まず青銅器を作ろうとなったら金属を調達してこないといけないですね。銅山掘ったりして、鉱石を手に入れて、青銅というのは銅と錫の合金なんで、錫も手に入れないといけないですね。現在中国に、古代開発されていたといわれる銅山が見つかっていますし、インゴットといって銅の純度を高めた板みたいにしたものが出土したりしているので、当時銅の鉱石というのはそういう形で流通していたというのが分かっているんですけども、それが流通して、今度は青銅器を作る工房に調達されるわけですね。そうすると次は、銅の鉱山、鉱石って不純物がすごい多いので、リファイニングしないといけない、純度を高めないと使えないわけです。そういう工程を精錬すると、それでやっと鑄造に使う金属というのができるわけですね。僕も鑄造なんか自分でやったりんですけども、鑄型使う前に皿合わせなんて言い方するんですけどね、溶かすための青銅をちょっと溶かししたりして、インゴットみたいなのを作ったりするんですけども、それから次青銅器を作るために鑄型を作らないといけない。ここは「鑄型製作」なんて簡単に書いてますけれども、鑄型は土でできていますので、殷周青銅器の鑄型というのは、その土もなんでもいいというわけじゃないですよ。すごく粒子の細かい土を使わないといけない、鑄造の造形というのは土で全部決まってしまうので、ここでいい素材が手に入らなかったら、いい青銅器というのは作りようがないですね。それをどう手配したかというのは、わからないところも多いんですけども、そういうことをしないとダメ。で、鑄型をつくりますよね。それから青銅を溶かして流さないといけないですから、溶かすために炉を建てないといけないです。これも非常にわからないことが多いんですけども。

まあ、僕たちが鑄造しているときはこういう炉を組んでですね、鑄造したりしてますが。まあそういうことです。で、鑄型に溶かした青銅を流し込んで、青銅器ができますよね。そうするとオーダー主、わかんないですけど、その人の元で使われて、最終的には廃棄されるなり副葬されるなり、そういう非常に複雑なプロセスというのがあるわけです。先ほど佐々木先生のお話の方で、青銅器がお墓から出土しましたよというお話が出てきましたけれども、あれは青銅器がいろんなプロセスを経ていく中の本当に最終段階しか表していないわけなんです。お墓に副葬される前にいろんなプロセスを経て最終的にはお墓の中に入るということなんですけれども、ところが、これを捉えようとしてもなかなか難しい、というのも考古学的に青銅器を発掘するといったって、結局は最後に終着点というか、その記録しか残らないというわけです。要するに、お墓から出てきましたという事実しか捉えられないわけなんです。我々には、だから、どういう過程を経て最終的にはお墓に入るようになったのかというのは、実はこれは非常に難しいんだけど、それが社会を捉える上ではやはり重要だと。だから考古学だけじゃなくて、文字資料の助けも得ながらですね、そういう青銅器の一生、ライフヒストリーというものを復元していくことが必要じゃないかと、そういう風に考えています。そういう研究を最近はやっとやっているというわけですね。

これは僕たちがやっている鑄造実験の様子です。この話も別の機会にできればと思います。さて、先ほどから佐々木先生のお話でも出てきましたけれども、青銅器がお墓から出てきましたという話があったんですけども、そもそも青銅器がお墓から出てくるといのはとても不思議な現象なんですね。なぜなんだろうかというのがありまして、というのも中国古代の青銅器というのは「彝器」と言われます。難しい漢字を書くんですけども。この「彝」というのはどういう意味なのか、先ほど器の総称だというお話が出てきましたけれども、下田先生のお話に出てきた説文解字という辞書を紐解くと、彝というのは「宗廟の常器なり」と書かれているんですね。つまり、この宗廟というのは当時の祖先祭祀ですね、祖先を祭る場なんですけども、そこに常に置いてある器ですよという風に書いてあるわけなんです。宗廟に置いてあるはずの器が何でお墓にあるんですかという話になるんですよね。で、先ほどから出てきている金文というのを読むと、その器がどういうきっかけで、どういう目的で作られたのかというのが記されて場合がありますけれども、金文の文書の最後の方にはですね、「子々孫々永く宝として用いよ」という句が見られます。

これは復習になりますけど、さっき佐々木先生のお話に出てきた「泉簋」のうちに所蔵されている銘文なんですけども、内容はもうご説明いただいたと思うんですけども、最後の方見てほしいですね、「子々孫々永く宝とせよ」という句が出てくるんですね。泉という人が伯雍父の恩寵にこたえるために、自分の先祖をお祀りする器を作らせたと書いてあるんですけども、最後に子々孫々永く宝として使っていきなさいと書いているにも関わらず、これは泉簋に限らないですけども、なんでお墓に埋めちゃうのというのがあるんですね。実はこういう問題提起をしていながらなんですけども、これははっきりとはわからないんです。これは、先ほど出てきた昔鷄簋、本当は韓侯簋と呼ぶんだというお話でしたけども、それが出土している状態の写真です。2014 年かな、私が周原遺跡、周の都と呼ばれている遺跡があるんですが、そこに発掘調査で参加してまして、ちょうど私がいるときにこのお墓が発掘されて、結構な騒ぎになってましたけども、ちょっと余談ですけども、こんなに青銅器が出てきたんで、盗掘者が出てきては困るということで、このお墓が出てきた次の日から、そのお墓の隣にテントを建てて、守衛さん二人、番犬二匹、あとなんかスタンガンのような武器を持って、武装してここを守ってという(笑)ことをしていました。そういった物々しいことになってましたけども。

これは私が撮った写真ですけども、お墓の中にぐちゃぐちゃと青銅器があって、その中の一つがさっき出てきた昔鷄簋なんですね。実は青銅器というのは、ほとんどがお墓から出てくるといのが多いんですけども、それ自体が謎に満ちているというか、なぜそうなのかというのがよくわからないという、非常に困ったものたちなんです。ところが、100%お墓から出てくのかというと、そうじゃないんですよ。これは先ほど見た昔鷄簋のお墓からだいたい何メートルくらいかな、歩いて 30 分くらい行ったところなんですけど、莊白窖蔵というのがありまして、同じく周原という遺跡から発掘されたものなんですけども、ここから青銅器が貯蔵穴、穴倉から出てきたという例が出てきたんですよ。だからこれ、お墓じゃなくて、貯蔵穴から青銅器が出てきたという例です。これにもいろいろ説があって、まあ青銅器というのは先ほども言いましたように、宗廟で使い続けるものなので、普段はこういう貯蔵穴で保管していたんじゃないかという説があるんですね。たまに取り出して祖先のお祀りをするときに使うというのが、きっと当時の使い方だったんだろうという説があります。この莊白窖蔵、これは西周時代の後半期のものだという風に言われていますけれども、春秋戦国になると、例えばこんな遺跡があって、これは鄭という国の遺跡だという風に言われていますけども、これはこうやって整然と青銅器が並べられてちゃんと取り出して使える状態で埋納されているというのがありますから、確かにこういう状態で普段から保管されていたという可能性が考えられるわけですけども、いずれにしても、ひょっとしたらこれは最終局面までいかなかった器たちかもしれないですよ。要するに、普段はこういう風に保管されていて、時たま宗廟でお祀りをしていた器が、何らかの原因で、お墓に入ることがあったわけだけれども、ここに発見されている器たちというのは、

お墓に入る前の段階で埋まってしまって、それが今考古学的に遺跡として表れているという可能性も考えられるというわけなんです。つまり、青銅器のライフヒストリーというのを考えるときにはですね、非常にいろんなあり方があった可能性が高いということです。すべてが作られてお墓に埋められているというわけじゃなくて、いろんな経緯で、いろんな道筋をたどっていた可能性があるということが、こういうところからわかるわけなんです。つまり、ライフヒストリーが非常に多様性に富んでいた可能性があるということです。

先ほど佐々木先生のお話から、昔鷄という人のお墓から韓侯が作らせた器が出てきたという話がありましたよね、それはおそらく韓侯からプレゼントされたんじゃないかという話がありましたけれども、そういう例ってほかにも実はあるんですね。今回「贈与された彝器」という風に書いていますけども、今回ご紹介するのは王子午鼎というのがあります。これはみなさんのプリントにも載せてますけれども、河南省淅川県というちょっと南の方から出てきたんですけども、春秋戦国時代の楚の国に関連した青銅器がたくさん出てるところでして、そのうちの一つがこの鼎なんですけど、これ実は3、4年前に日本に来てて、東京富士美術館というところで、展示がされていたんですよ。なので、日本で生で見る機会があった器なんですけども、これすごく長い銘文が記されていて、現代語訳したものをプリントの方に載せてますけども、なんて書いてあるかざっくりと読みますけども、王子午という人が自分の父親を祭るためにですね、この鼎を作らせたと書いてあるんですけど、ちょっと後半部分は何言ってるかよくわからないところがあるので、ちょっと暫定的な訳になってしまうんですけども、要するに、今までまじめに頑張ってきましたと、政治にもいろいろ頑張ってお仕事頑張ってきましたと。で、自分の子孫に自分の功績を忘れないように、模範にするようにしなさいと自分で書きちゃってるという(笑)ような文章だと思うんですけども、細かいところの意味、解釈というのはきっといろいろあると思うんですけども、総じてみるなら、この器が王子午という人が自分たちの一族が祖先祭祀をする場で使い続けて、常に思い出してほしいという意図で作ったと解釈して間違いないと思うので、これは彝器として作られたというのは間違いないんじゃないかと思うんですね。ところが、この器非常に面白いところがあって、この器蓋がついてますでしょ、このタイプの鼎で蓋が付くことはまずないんですよ。なのにこのペラペラのすごい薄い蓋がついてまして、そこにも銘文が入ってまして、そこに全然違う人の名前が書いてあるんですね。この邲というのが文献なんかに出てくる人物で間違いないという風に言われてまして、これ蘧子馮だという風に考えられてまして。この王子午と蘧子馮というのは二人とも歴史書の中に出てくるので、別の人物だというのがはっきりとわかる人物なんです。二人とも楚という国の総理大臣を務めた人でして、蘧子馮という人は王子午の次に、令尹というんですが、楚の国の総理大臣になった人なんです。だから、なぜかこの王子午という人が「子々孫々永くこの器を使ってね」と書いた人とは全然別の人が持ってるということとても不思議なことが起こってるということなんです。こういうことから見て、彝器というのは本来宗廟の中で使い続けるものなんだけれども、何かのきっかけで別の人にあげちゃうということが行われていたんだろうということが王子午という鼎の銘文からわかるんですね。

ほかにも青銅器をあげちゃうということがあったのかということなんですけれども、これは金文じゃなくて古典文献の方になるんですけども、『春秋左氏伝』という文献を読むと、どうもこういったことをしてたっぽいというのが書いてるんですよ。ここで訂正なんですけども、襄公25年じゃなくて昭公15年です。ここでもまたつらつらと書いてあるんですけど、どういうエピソードが書いてあるかということなんですけれども、晋の荀躒という人が周のお後の葬式に行った話なんです。その時に荀躒という人はどうやら手ぶらで行ったらいい、そうすると周の王様から、「ちょっと待て、なんでお土産持ってきてへんねん」と言われるわけなんです(笑)。荀躒の介添をやっていた籍談という人が、どうやらこの人は記録をやっていたようなんですけども、その人と相談してだとおもうんですけど、晋はすごい田舎なんで、荀躒が「すいません、ちょっとお土産持ってこれませんでした」という風に言うというくだりがあるんですね。で、その葬式の宴会で魯が献上した壺を酒樽として使用し

たと書いてて、その後に周の王様から「なんでみんなはお土産持ってきてるのに、君は持ってきてないの」と言われているので、恐らく葬式に限らずいろんな儀式の場で器を献上するというのはたぶんされてたんだと思うんですね。今は彝器という風に言われていますけど、たぶんほかの国にあげるということをしていたんだと思います。ちなみにこのエピソード続きがあって、王様に「すいません、晋田舎なんで、色々大変でお土産持ってきてませんでした」みたいなことを言うんですけど、周王はその後「お前も彝器もらってるんだから、そのことを忘れてるんじゃないか」と、結構しつこいんですね、この王様(笑)というエピソードが続いているんですけど。まあともかく、ある程度歴史的な事実を反映した記述だと思うので、こういう葬式のような場で器を贈与するというのが多分当時行われていたんだと思います。

それともう一つ面白い例がありまして。これは大英博物館に所蔵されている器なんですけども、趙孟介壺という器がありまして。この器の淵の部分に実は銘文が書いてあって、その内容がレジュメの3ページ目に書いてあって、呉の王様と会盟を行ったと、その時にこの器を作った人が参加したんだと思うんですよ。趙孟という人の介添を務めましたと。で、呉の王様は銅の地金を下賜したので、それを使って器を作りましたという風に書いてあります。これも先ほどのセキケイキと同じで誰が器を作ったのかというのが書いてないんで、ここも諸説あるんですけど、ここでは深入りしませんが、趙孟という人の介添をした人が作ったという説に一応したがっていきますけれども、趙孟というのは晋という国の重要な大臣の一人なんですけども、実は黄池という地で呉と晋が会盟を行ったというのが歴史書の中に記録されてるんですね。なので、それをきっかけに作った器だろうというふうに考えられています。こういうことが書いてあるので、恐らく会盟というのが、当時の外交儀礼、外交の場ですよね、何か記念に青銅器を作ることがたぶんされてたんだと思うんですよね。それを贈与するということが行われていて、それが儀礼上重要なことだったんだろうという風に思います。なので、こういう事例で見ると、青銅器が単に使用する人に流通するという過程というのは、本当に一本道ではないですし、一族同士の贈与であったりとか、それだけじゃなくて外交、あるいは外交戦略ですね、それらがすごく反映されている可能性があるという風に考えられるかなと思います。で、この晋という国がやっていたらという青銅器の工房跡が実は中国で発見されていて、それを見ると非常に面白いんですね。山西省の侯馬という場所です。そこで、青銅器の工房跡が発見されたらしいんですね。こういう鋳型がたくさん出てるんですね。見て分かるようにすごく細かい紋様というのが鋳型につけられていて、これを使って青銅器を鋳造するわけです。この鋳型に表されている紋様、すごく特徴的でして侯馬以外に見られない特徴がいろいろあるんですよ。そうすると、この特徴が、これは侯馬の特徴だということが明らかだということです。だって、この鋳型が工房跡から出ているわけですから。そうすると中国から出土されている紋様を調べて、この紋様と同じ特徴の青銅器を見つけることができれば、ここで作られた後で流通したものだというのがトレースできるわけなんですね。そういうことができるということが非常に重要な青銅器なんですね。ちょっとこういう青銅器、侯馬で作られた侯馬産といってもいいかもしれないんですけど、僕は侯馬系青銅彝器という言い方をしてるんですけども、侯馬系青銅彝器というのがどれくらい中国で流通しているかということなんですけども、不完全な地図なんですけども、こんな感じになってるんですね。すごく広い範囲でこの侯馬の青銅器というのが流通している、つまりこれは晋という国の管理の下で運営されていたこの侯馬の工房から生産されて、各地に流通していったということが読み取れるわけなんですね。先ほど見た『春秋左氏伝』の話であったり、趙孟介壺という銘文なんかを見ると、なぜこんな遠いところまで行くのかというと、これはたまたまなんとなく流通していったということじゃなくて、これは晋という国の外交戦略が反映されている可能性が非常に高いわけですね。この地図にもやっぱり特徴があって、晋と仲悪いところには全然ドットが落ちないわけですね。山東にある斉という国があるんですけど、ずっと戦争していたんですけど、そこには全然侯馬の青銅彝器行っていないですし、キングダム of 秦、こっちも仲悪いんですけど、

ここからも全然出てこないですね。だからやっぱりランダムな流通ではないと思うんですよ。晋というのは目的をもって、青銅器をあげるということをたぶんしてた、それがやっぱり外交上重要だったという風に思うんですね。この地図で注目してほしいんですけども、すごい北の方まで行ってますよね、これ今の遼寧省というところなんですけども、遼寧省の西部、遼西まで侯馬の青銅彝器というのが流通してるんですよ。で、遼西というところで最近面白い発見がありまして、東大杖子遺跡というお墓が出てるんですけども、こんな鼎が遺跡から出てきてまして、この紋様をアップして示すとこんな感じ、これ非常によく似ていますよね。これ、さっきお見せした侯馬の鋳型の写真なんですけども、龍の表し方なんか非常によく一致しているんですけども、私は侯馬産の青銅器がここまで流通した結果だという風に考えていますけれども、本当に遙か遠くまで侯馬の青銅器が行ってるんですよ。じゃあなんでここまで流通するのかということなんですけれども、私は、これは晋の外交戦略の一環だという風に解釈しています。実は、この東大杖子遺跡とほぼ同じ時期に、今でいう北京だとか河北省、このあたりですね、にほぼ同じ時期に侯馬の青銅器というのが流通しているんですよ。で、文献なんかを調べてみると、晋とあとここにあった燕という国ありますよね、つばめという字を書く燕、これが外交を結んでいたという記述がわずかながらに見出すことができるので、恐らく晋は燕と仲良くするために、自分たちの工房で作った青銅器を多分あげてた、その結果、侯馬の青銅器がここまで流通することになったと思うんですね。じゃあ遼西はどうか、たぶんね、遼西と晋が直接やり取りをしていたということは多分ないと思うんですけども、恐らく燕の人たちが晋の青銅器をもらった後また、遼西の人たちにあげる、再分配という言い方しますが、そういうことをしてたんじゃないかなという風に思います。というのも、西周時代初頭にそういった事例があるので、たぶん同じことしてたと私が解釈してたんですけども。そうするとですね、この侯馬の青銅器というのはすごく複雑なライフヒストリーを持つということになるわけですね。侯馬というところで作られて、それが一回燕まで流通していった、さらに燕の人たちの再分配によって、遼西まで流通していったという、非常に複雑なライフヒストリーを持っていたということになります。

もう一つ面白いことがあって、先ほどのこの東大杖子遺跡、この鼎が示したお墓から実はこういった銅剣が発見されています。これは遼寧式銅剣という風に考古学者が呼んでいるやつなんですけれども。これはね、日本の弥生文化の銅剣があるんですけども、右に僕が適当に撮ったものを載せているんですけども、これの原型が実はこの遼寧式銅剣なんです。なので、遼西ではこの侯馬の器、それから在地の、このすごい独特な銅剣というのが共存している。で、これは私の研究テーマではないんですけども、遼寧の在地の独特な青銅器文化というのは、こういった晋であったり、この中原地域の人たち、中原地域の青銅器文化と接触する中で育まれていったものだというのが、いろんな人によって研究されています。それが、流れ流れて、この弥生の銅剣につながっていくわけなんですけれども、先ほど言ったこの東大杖子遺跡、前 5 世紀の前半くらいのことなんですけれども、その時期に遼寧の青銅器文化というのがすごく発展していくんですね。それが、結局は日本にすごく影響を与えているんですけども、じゃあなぜこの時期に遼寧の青銅器文化がすごい栄えたかっていうと、先ほど述べたように晋の外交戦略というのがすごく大きな影響があったと思うんですね。その時期に晋が燕に対して青銅器を配ったりしているので、その影響が遼寧にも及んで、接触する中で在地の文化がすごく発達するっていう、そういうある種の玉突き事故みたいなものが起こっていたと思うんです。その玉突きの一番最後が日本にやってきて、それが弥生の銅剣に影響を与えたというのが、一応私の考えであるんですけども、そういうことが起こっていたということなんです。だからやはりその、青銅器のライフヒストリーに着目することによって、中国だけでなく東アジア全体の動きっていうのも捉えるきっかけになるかなという風に考えています。

ここはちょっとね、僕の考えというところなんですけども、じゃあなぜ前 5 世紀、春秋後期と我々は呼んでいるんですけども、その時期に青銅器がとおくまで流通することになったかということなんですけれども、これ

はちょっと分からないところも多いんですけど、僕の解釈なんですけれども、当時はやはり乱世だからということなんです。文化人類学で「レガリア」という言葉があったりするんですけども、地位の継承の上で非常に重視されているもの、例えば日本の天皇器でいうと三種の神器というのがありますよね。あれを持っている人が正当な継承者だという考えがありますけれども、あれって常にそういう風に考えられているわけじゃなくて、すごく王権が強い時、支配者の権力がすごい強い時っていうのは、なくなったり壊れちゃったりして、作り変えられるってことが普通に起こりうるらしくて、逆に王権がすごく弱くなると、権力が弱くなると、三種の神器的なもの、誰が持っているのかとか、じゃあそれがちゃんと昔から伝わってきたものなのかということがすごく重視されるようになるんですね。だから、日本でも南北朝時代、南朝と北朝に分かれた時代っていうのは、三種の神器の行方をみんなものすごい気にするわけなんです。それは、権力が不安定だからこそ、ものにすごい執着するという時期があって、今お話したように春秋後期っていうのは、すごく分裂の時代ですよね、まあキングダムはだいぶちょっと古いにしろね。そういう時代だったからこそ、青銅器がすごく重視されたんだと思うんです。だから晋の人たちは、それを逆手にとって、相手に贈与して、相手に言うことを聞かそうと、そういう外交戦略をたぶん取ってたということなんです。その結果、青銅器がすごい広い範囲で流通するっていう、たぶんそういうことがその時代で起きてたという風に私は考えているんですけども、それが結局玉突き事故的にいろんなところに影響を与えることになって、日本にも間接的ではありますが、影響を与えたんじゃないかなというのが、私の見立てであります。

ということで、ここまで若干時間オーバーしちゃいましたが、文献史学とは全然異なる観点ではあるんですけども、文字に残らない証拠っていうのもいろいろ使って考えていくと、この時代のいろんな側面が明らかになるんじゃないかなと考えていまして、今後もこういう風な研究を続けていこうかなという風に考えていますということですね。ということで私のお話は以上になります。ありがとうございました。

質疑応答

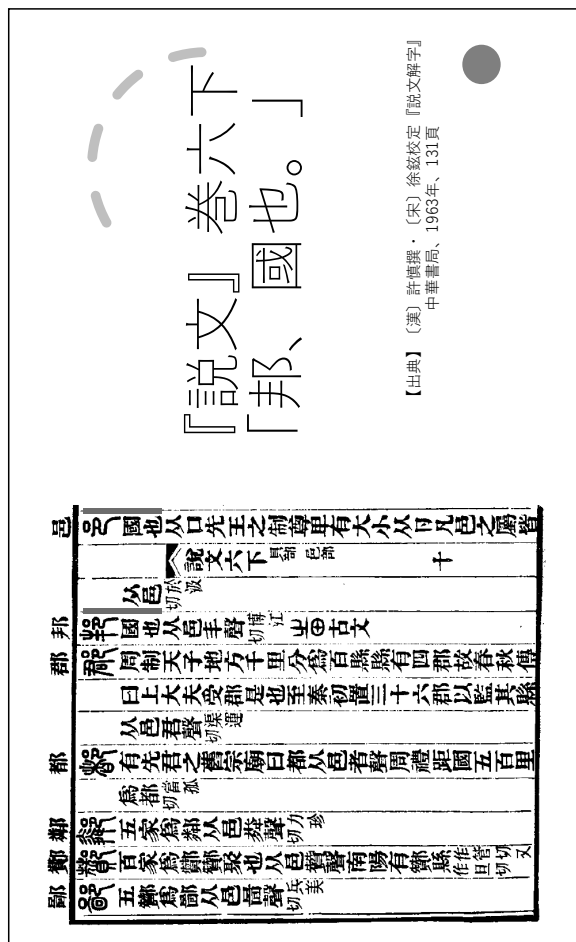
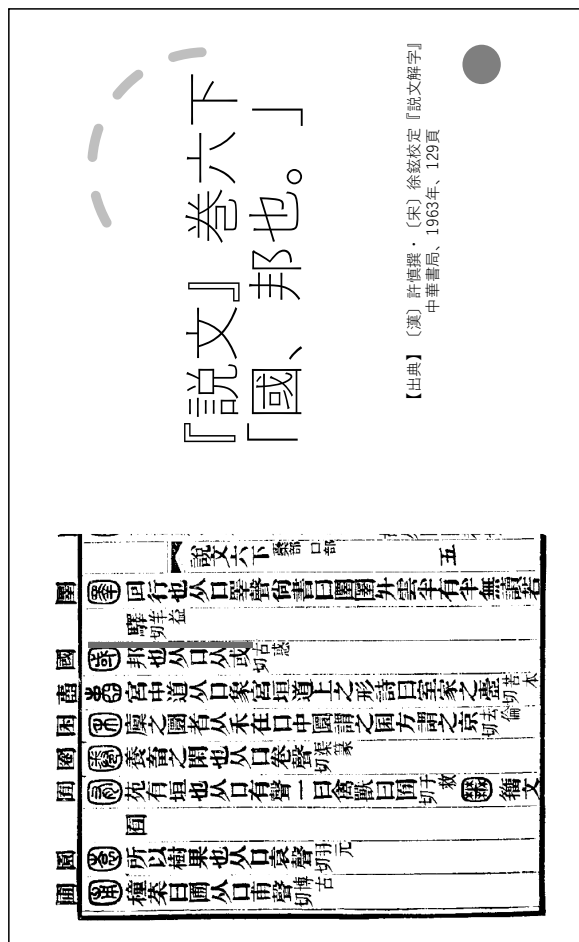
(略)



【圖】
【圖】
に
『字訓』
白川靜

- [illegible]

【出典】大西克也「『国』の誕生—出土資料における『或』系字の字義の変遷」
鄭浩楚簡研究会編『楚地出土資料と中国古代文化』、汲古書院、2002年、450頁



白川 静 『字統』 コク・くに・みやこ

- ・【前略】(説文)六下に「邦(くに)なり」とし、邑部六下には「邦は國なり」と互訓するが、邦は封候(ほうじゅう)して邦域を示す字、國は国都で武装都市を意味する字であるから、必ずしも同意でない。一波線：下田
- (周禮、天官、大宰、鄭玄(じょうげん)注)に「小なるを邦と曰い、小なるを國といふ」、また『玉篇』には「小なるを邦と曰い、大なるを國といふ」とあって相反するが、字の原義は異なる。
- 金文には或四(こく)・南或(なんごく)・内或(ないこく)など、国の字に或を用い、西周後期以後に至って王國・下國のように國を用い、あるいは二(邑+或)を作る。国家は古くは邦家という。王家と邦とは同一のものである[註]。国都に軍政の中心が多つてから、國家という。
- 【典拠】白川静『新訂字統』平凡社、2004年、333頁

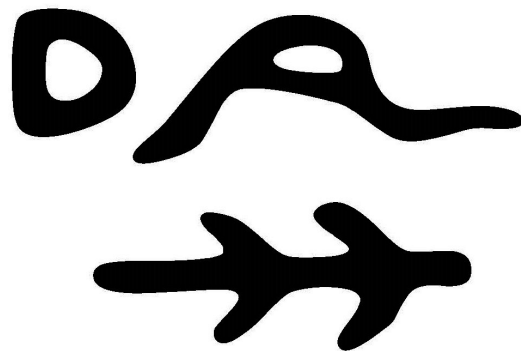
【出典】戸川芳郎監修『全訳漢字海 第四版「小型版」』三省堂、2019年、1462頁。

5

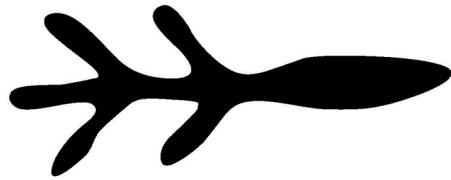
白川静『字統』
ホウ・くに・みやこ【邦】

- ・**形声** 旧字は邦に作り、丰（ほう）の声。
 【説文】六下に「國なり」とし、前条の
 邑（ゆう）にも「国なり」とあって同訓。
金文の字形は、丰の部分を**土主（土地
 神）**に**若木の形**に作り、**封樹の意**を示し、
 傍らに**邑**を加える。（中略）邦は封建によっ
 て作られたくに、**国（國）**は**武装した城**
 邑をいう。邦は領土をいい、**国は国都を**
 いう。（後略）

【出典】白川静『新訂字統』平凡社、2004年、814頁



6



『甲子合璧』

- ・上古音 [piuŋ, piun, poŋ]
- ・漢音 フウ
- ・文意 「土盛に植えたり」と、字を植えたり、「邦」の受ける金、字を植えたり、「封」の意となつた形である。當時は境界にして繁文を加へた。益書（β）も邑（β）である。

【出典】落合淳思『甲骨文字辞典』朋友書店、2016年、295頁

2

白川静『字統』
ワク・ヨク・コク・イキ・ク【或
に・あるいは・うたがう】

- ・会意** □(い)と戈(か)とに従う。□は城郭の形。これを戈(ほこ)をもって守る意で、或(国)の初文。金文や副詞に用いるに及んで、その初義を示す國の字が作られた。或の外にさらに外郭の□を加えた字である。(中略)或・域・國はもと一字であった。或がのち域と國とに分化したとみてよい。金文に「宗周鍾」**𠄎**(なが)**𠄎**(なぐ)く四**𠄎**(しこく)を保たもたんことを」(毛公鼎)「四或を康(やすんじ)能(おさ)む」など、或を國の意に用いる。(後略)

【出典】白川静『新訂字統』平凡社、2004年、960頁

88

DA

「田」の「性」の画期性

- 会意** □ **(い)と巴(は)とに從う。** □は都邑の外郭、城壁をめぐらしてゐる形。巴は巴(せつ、り)が本形、城邑・都邑を坐する形。**城中に人のあることを示し。** **巴**は巴(せつ、り)が本形、城邑・都邑を坐する形。**城中に人のあることを示し。** **巴**は巴(せつ、り)が本形、城邑・都邑を坐する形。**城中に人のあることを示し。**

【出典】白川静『新訂字統』平凡社、2004年、866頁

9

大正天皇

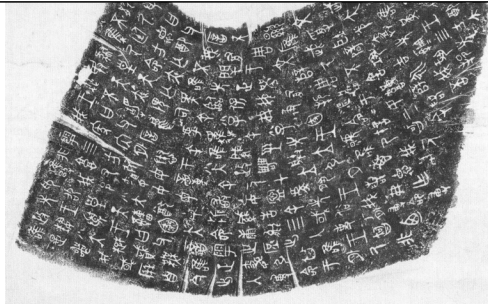


- て曰大て其民
りとあす濟陽有路い言
在(有)を遂に中も遠に
の願の(有)を(有)を
宗間に天々四方を(有)を
王(有)王(有)王(有)王
月若(有)を(有)を
九王(有)を(有)を
れ(有)を(有)を
(有)を(有)を
(有)を(有)を
佳(有)を(有)を

【参考】六一、大孟鼎（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

10

毛公鼎



- 王曰く、**父**(「+音」)よ。之の、庶の出入して外に使用し、命を敷き取(おいて)、小大の楚璽をおさる。其の王璽璽(あ)を弘いこと無くんば、廼これ。我或を賣うこと唯(あらん)。今略
- 王曰く、**父**(「+音」)よ。**余**我我が家を**三**(□+弓：おに)に命じて一方に誦(なみ)く、**我**が我我が母(な)く、庶の貯を璽(よい)うレシムること勿かれ。

【参考】一八一、毛公鼎（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

11

整理の問

- [方法] ラングとパロール：意味論がコンテキストから離れて語や文の意味を扱うのに対し（ラング）、語用論では具体的な発話の場面における意味を考察する（パロール）。

【参考】斎藤純男『言語学入門』三省堂、2010年、135頁

或	地域を指すことに重点。固有名詞と結合できない。 数詞との結合は「四」に限られる。	東或、南或、中或、 内或、四或
邦	当初は、樹木を受けて範囲を示すこと。ただし、「邑」と結合し、土地と人が組み合わさった。具体的な数詞を加えられる。	周邦、井邦、万邦
邑	居住の実態があり、徴戸から数百戸にも使える。部族・城郭の単位となりうる。ために、1つ1つ国家を構成しうる。	大邑、邑人、新邑

12

邦國

- ・佳（これ）王の正月、辰は庚寅に在り。王若（かく）のごとく曰く、
 泉伯（ろくはく）**二**（戌＋冬：しゅう）よ。ああ、乃（なんじ）の
 祖考よりして、**周邦**に勲有り。**四方**を佑臨し（ゆうへぎ）、天命を
 惠張す。女（なんじ）駑（つ）ぎて墜（おと）さざれ。（後略）
 〔泉伯**二**（戌＋冬）殷〕
- ・王若（か）くのごとく曰く、師克よ。丕顯なる文武、大命を膺（お
 う）受し、**四方**を匍有す。則ち**繇**（もと）佳（これ）乃（なんじ）の
 先祖考、**周邦**に勲有り。王の身を干吾して、爪牙と作（な）れり。
 （後略）〔師克**二**（繇＋冬）周〕

【参考】九二、景伯二(戈+冬)殷 一七二、殷 金文通釈7』平凡社、2015年)

那 個 。

- ・(前略)王曰く、師詢よ。哀しむことと肅(つつ)しむことと克(あた)わらず、故に先王に承(う)くることと亡(な)し。嚮(さき)に女汲(つつ)しみて周邦を純卹(じゅつ)し、余小子を綏んじ位あらしむ。乃の事を載(おこな)い、佳(これ)王子の身に厚誼あらしめたり。今、余佳(これ)、乃の命をショウキヨウス。女に命じて、我が邦の大小の猷(はかりごと)を専雅(けいよう)せしめ、邦ユウを演辭(こうがい)ならしむ。〔師詢殷〕
- ・(前略)鬻(れい)曰く、天子、丕睨不其(ひかひき)にして、萬年まで我が萬邦を保たんことを。(後略)〔鬻方尊・鬻方彝〕

【参考】一八三、師詢段 一〇一、蠡方尊・蠡方彝（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

周邦・邢邦

- ・王若(か)くのごとく曰く、詢よ。丕顯(ひけん)なる文武、命を
 受けたまひしとき、則ち乃(なんじ)の祖、周邦を奠(さだ)めた
 り。今余女に命じて、嫡として邑人・先虎臣・後庸・西門戸
 (夷)・秦尸(夷)・京尸(夷)・ヘイ尸(夷)・師岑(れい)側
 新、□華尸(夷)・由□尸(夷)・ウ尸(夷)、成周左亞、戊秦
 人・降人・服尸(夷)を官嗣せしむ。(後略)〔詢段〕
 ・馬曰く、丕顯(ひけん)にして桓桓(かんかん)たる皇祖穆公、克
 (よ)く先王を夾紹(きょうしょう)して、四方を奠(さだ)めた
 まえり。肆(ゆえ)に武公も亦朕(わ)が聖祖考幽大叔・懿叔を還
 忘(かばう)したまわれ、禹に命じて朕が祖考をうけて、井(邢)
 邦に政せしめたまう。肆(ゆえ)に禹も亦祖考をおうたらず、朕が
 辟(きみ)の命を賜恭(てききよう)す。〔禹鼎〕

【参考】一八二、詢殷 一六二、禹鼎（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

袋掛

- [illegible]

【参考】一三、明公殷 一六、保尙・保尊 五二、宜侯矢簋 一七八、師賁殷（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

益世

- ・佳（これ）八月、初吉、宗周に在り。甲戌、王、毛伯に命じて、虢城の服（こと）をつぎ、王位をたすけ、**四方**の亟（きみ）と作（な）り、繁・蜀・巢の命を秉（と）らしむ。鈴勒（れいろうく）を賜う。咸（おわ）る。王、毛公に命じ、邦冢君（ほうちやうく）に命じ、**二**人を以（ひき）いて、**東或**瘡戎（えんじゅう）を伐たしむ。咸（おわ）る。王、吳伯に命じて曰く、乃（なんじ）の師を以いて、毛父（もうふ）を左比せよと。王、呂伯に命じて曰く、乃の師を以いて、毛父を右比せよと。
- ・遣（けん）、命じて曰く、乃の**族**を以いて、父（ほ）の征に従い、**城**をいでて父の身を衛れと。三年、**東或**を靜（やす）んじ成（ま）も）らざる亡（な）し。（後略）〔班駁〕

【参考】七八a、班殷（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

格母 · 格母

- ・隼(これ)王、南宮に命じ、反せる虎方を伐たしめたる年、王、中に命じて先んぜしめ、**南或**(中略)(後略)を省して實行し、**王の位**(よく)行官をおさめたり。(中方鼎／中廟)
- ・王肇(はじ)めて文武の勤めたるまゝえる**疆土**を通省(いっせい)す。**南或**服子(ふくし)あへて我が土を陥虜す。服子迺ち遭間(講つ)して其れ至り、厥(そ)の都をはく伐す。南夷東夷、具見するもの(和)来りて逆えて、**王に昭(ま)みゆ。**南夷東夷、具見するもの十又六邦なり。(中略)黠(宗周鐘)其れ萬年まで峻く**四或**を保たんことを。
- ・隼(これ)斌(武)を自(も)ち、既に大邑商に克(か)ち、則ち天に廷告して曰く、余は其れ茲(こ)いて之(こ)の辭民(げづみん)を自(も)ちいんと。「刑尊(何尊)」

【参考】七一、中方鼎／中甌 九八、宗周鐘 補釈一、何尊（白川静『著作集 金文通釈7』平凡社、2015年）

𠂇

- [illegible]

【参考】一三〇、師瘖段 一三九、散氏盤 一七三、師酉段（白川静『著作集 金文通釈 7』平凡社、2015年）

方 田

- 三
 事(四)八月、辰は甲申に在り。王、周公の子明保に銘じて、
 事(四)方を尹(た)だし、卿事寮(けいじりょう)を受(さ)ず)けし
 む。丁亥、矢(そく)に命じて周公の宮に告げしむ。公、命じて、
 不顯(ひけん)なる皇祖考、穆穆として克く厥(そ)の徳を哲にし、
 厳として上に在り。厥の孫考を王位をたてす。王、ウウ二カ
 用て大命をシヨウの徳を専ら求め、
 不肖(ちが)かき能(お)しめ、
 寮を嗣(お)さ
 略(番役)

【参考】二五、令舞 一六〇、番生段（白川静『著作集 金文通釈 7』平凡社、2015年）

戦争

- (前略) 邦寶、其の旅服を尊(お)きて、東嚮す。孟、多旂(たき)を以(ひき)いて、鬼方(き)の(帛=俘獲の名・数を記す帛)を佩びて……。告げて曰く、王、孟に命じて、□□を以て鬼方を伐たしめたまいしに、(これを撃破して)執置(しつしゆ)とす。人、獲賊(かくかく)四^と千八百^と□^と十二^と、人を俘(とり)こ^ととす。と^と虜^と三^と千八^と十二^と人、馬を俘(と)ること……匹、車を存ること三^と十^と、年三百五^と十五年、辛三十八^と年、羊を俘れり。(後略) (小孟鼎)
- 隹十又二年初吉丁亥、號季子白(かくきしはく)、寶盤を作る。不^と顯なる子白、戎工に壮武にして、四方を経維(けいい)す。玁狁(けんいん)を搏伐(はくばつ)す。洛陽(きた)に。折首五百、執訊五十、是を以て先行す。桓桓たる子白、賊を王に獻ず。(後略) (號季子白盤)

【参考】竹内康浩『中国王朝の起源を探る』（世界史リブレット95）山川出版社、2010年

21

西周（前1050頃～前770頃）から戦国（前450頃～前221）への変化

- できないことができるようになった
- [仮説]
- 交通革命（道路、移動手段、システム…）
- 生産革命（農工具、組織、環境、方法…）
- 商業革命（貨幣、市…）
- 戦争革命（戦国組織、戦術、武器…）
- マネジメント革命（統治・行政運営方式…）
- 哲学革命（認識論、存在論…）

22

西周・春秋時代のクニのような存在をどのようにとらえるか。

- 城郭都市（都市国家） [貝塚茂樹・宮崎市定]
- 邑制国家 [松丸道雄・江村治樹等]
- 城市国家（都市国家） [侯外廬]
- 初期国家／祭儀国家 [小南一郎・岡村秀典等]
- 部族国家 [董書業等]
- ★着眼点：城郭の有無、市民権の有無・あり方、民会、私的所
有、内部の構成（氏族制度／氏族的共同体）…

23

主要参考文献

- 貝塚茂樹『中国の古代国家』（著作集第1巻、中央公論社、1976年）
- 宮崎市定『中国上代は封建制か都市国家か』（1950年原載、『アジア史研究3』同朋舎、1958年、『中国
古代史論』平凡社、1988年、『全集3 古代』岩波書店、1991年）
- 松丸道雄『殷周国家の構造』（『岩波講座世界歴史4 古代4 東アジア世界の形成1』岩波書店、1970年）
- 江村治樹『古代都市社会』（松丸道雄ほか編『殷周秦漢時代史の基本問題』汲古書院、2001年）
- 高木智見『孔子一我、戦えば則ち克つ』（山川出版社、2013年）
- 侯外廬著／太田幸男・岡田功・飯尾秀幸訳『中国古代社会史論』（原著1955年、名著刊行会、1997年）
- 岡村秀典『中国文明―農業と礼制の考古学』（京都大学学術出版会、2008年）
- 下田誠『戦国期を中心とする中国の古代国家形成論―その現状と課題』（『歴史評論』699、2008年）
- 大西克也『『國』の誕生―出土資料における『或』系字の字義の変遷―』（郭店楚簡研究会編『楚地出土資料と中国の古代文化』汲古書院、2002年）
- 松井嘉徳『西周時期の“國”』（原載1993年、『記憶される西周史』朋友書店、2019年）
- 竹内康浩『西周』（松丸道雄ほか編『中国史1 先史～後漢』山川出版社、2003年）
- 竹内康浩『中国王朝の起源を探る』（山川出版社、2010年）
- 佐藤信弥『周一理想化された古代王朝』（中公新書、2016年）
- 小南一郎『古代中国―天命と青銅器』（京都大学学術出版会、2006年）
- 小南一郎監修・山本英編『金文―中国の文字―』（公益財団法人泉屋博古館、2019年）

24

東京学芸大学 2021 年度公開講座
【63】
中国古代の青銅器銘文（金文）からみた社会と文化
9月27日(月)

作器者の判断の問題

佐々木 研太
(東京学芸大学個人研究員)

【資料 1】承殷 『集成』 4122、泉屋博古館蔵



伯雍父来自猷、蔑𠄎曆、賜赤金。対揚伯休、用作文祖辛公寶簠殷。其子子孫孫永寶。

→銘文に「寶簠殷を作る」とあり、器形も“殷”⇒○○殷
銘文に出現する人名＝「伯雍父」「𠄎」の2人⇒作器者はこの2人のどちらか。
①伯雍父来自猷、蔑𠄎曆、賜赤金。
伯雍父が𠄎の地からやって来て、𠄎の功績をたたえ、銅の地金を恩賞として与えた。
②対揚伯休、用作文祖辛公寶簠殷。
伯「雍父」の賜物に感謝の気持ちを表すために、文祖辛公を祀るための殷を作った。
③其子子孫孫永寶。

銘文のある青銅器の名称

(泉屋博古館 解説シリーズ2「青銅器の名称」より抜粋。執筆は小南一郎)

- ・青銅器は、「作器者名＋器形名」というかたちで命名されるのを原則としている。
- ・銘文の基本的な内容は、これこれの事がある、それを記念するために、A という人物がB という人物（BはAの父母や祖先であることが多い）の祭祀に用いる青銅器を作ったというものである。そうした銘文の中のAという人物が作器者と呼ばれる。作器者の名前には、個人名のほか、その人の官職名などをひっくるめてしまう例が多い。
- ・一つの青銅器に、一定の長さの銘文が付けられている場合、その作器者を知ること、それほど困難はない。しかし、複雑な銘文の中には、いくつもの人名らしい言葉が出現し、そのうちのどの人物が作器者であるのか、決め難い場合もないではない。

たいよう
対揚

ある人物からの恩寵に感謝の気持ちを表すこと。
「対」とか「揚」とかの場合もある。
そのときは、「こたフ」と読む。

対揚の主語（対揚する人物）＝ 作器者

例題：次のような銘文のある青銅器の名称を答えなさい。

隹王𠄎于宗周。王姜使叔事于大𠄎。賞叔郁鬯・白金・𠄎牛。叔对大𠄎休、用作寶𠄎彝。

→銘文には「寶𠄎彝を作る」とあるが、「𠄎」は容器の“総称”。

【資料2】<https://www.dpm.org.cn/collection/bronze/228110.html>より転載



器形は“𠄎”⇒○○𠄎

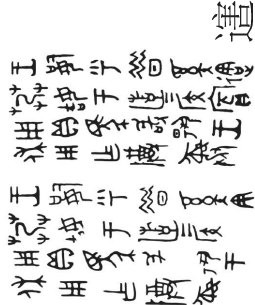
銘文に出現する人名＝「王」「王姜」「叔」「大𠄎」の4人⇒ 作器者はこの4人のどれか。

『故宮青銅器』＝135 叔𠄎 ○ 『殷周金文集成』＝4132 叔𠄎 ×

ここまでのまとめ：

対揚する相手と恩賞を与えた者とは同じ人物であることが多い。

【資料3】昔𠄎殷（？）※同銘の器が2つある。



左の銘には字面を失っている文字が非常に多く、また、「賓」が次字であることにも注目してほしい。
(参考文献③より転載)

【銘文釈文（順書き）】

王姁呼昔𠄎遣

葬姑于韓。韓侯寶

用貝・馬。敢揚王

休、用作𠄎彝。

王姁呼昔𠄎遣葬姑于韓。韓侯寶用貝・馬。敢揚王休、用作𠄎彝。

→銘文は「𠄎彝を作る」であるが、器形は“殷”⇒○○殷

銘文に出現する人名＝「王姁」「昔𠄎」「葬姑」「韓侯」の4人

・王姁＝周王（成王 or 康王 or 昭王）の皇后

・葬姑＝葬（国名）出身の姑姓の女性

周王室から韓に嫁入りした or 韓から周王室に嫁入りした

・韓侯＝韓（国名）の殿様

・呼…ここでは使役の用法

・于…「遣」という行為を行う場所（韓の国）を示す介詞（前置詞）

⇒周王の后である王姁が昔𠄎に葬姑を韓で（or 韓に）「遣」するように命じ、韓侯が貝と馬で「賓」した。

〔命令者→受命者〕王姁→昔𠄎（遣葬姑于韓）

〔賓〕韓侯→？（貝・馬）

〔対揚〕？（王休）

〔作𠄎彝〕？

賓（動詞の場合）

王室の使者など、明らかに上位にある者から特定の任務や職務を任せられた者が、赴任先でその任務や職務を果たしたときに、使者を派遣された国がその使者をもてなしたり、酬礼として物品を贈ったりすること。

→恩賞を与えることを意味する動詞ではない。

上位の者が下位の者に恩賞として物品を与えることを表す「賜」「賁」とは区別しなければならない。

韓侯が「賁」した相手は？

⇒王姁の命を受けて韓の国で何らかの任に就き、その任を果たした“昔𠄎”。

遣（動詞）

王姁が昔𠄎に命じた政治的な行為。学界でも諸説紛々で、詳細は不明。

→韓侯が昔𠄎を貝や馬で「賁」したのは、王姁の下命をやりとげた昔𠄎をねぎらうため。

〔賓〕韓侯→昔𠄎（貝・馬）

「王休」に対揚したのは誰か？＝この器を作ったのは誰か？

【資料4】昔雑直

隹三月乙酉、曩伯賜昔雑直、用对曩伯休、用作父工隙彝。(曩も同銘)

→曩伯が昔雑に貝を下賜したので、「曩伯の休」に対揚し、父丁をお祀りするためにこの銅器を製作した。

対揚する者（対揚の主体）＝昔雑＝作器者⇒ 昔雑直・昔雑尊

【資料5】小臣守殷（『集成』4179～4181）

隹五月既死霸辛未、王使小臣守使于侯。賓馬両・金十鈞。守敢对揚天子休令、用作鑄引仲寶殷。子子孫孫永寶用。

〔命令者→受命者〕周王→小臣守（使于侯）

〔賓〕？→？（馬両・金十鈞）

〔対揚〕守（天子休令）⇒ 作器者：小臣守

賓…王室から派遣された使者をもてなしたり、その使者に謝礼として物品を贈ったりすること。

賓の主体＝侯

賓の対象＝周王の命を受けて侯に赴いた小臣守

【資料6】南殷（器名、『集成』4195）

唯六月既生霸辛巳。王命南眾叔隹父帰吳姫飴器。自黃賓南璋一・馬両。

吳姫賓帛束。南对揚天子休、用作隙殷季姜。

〔命令者→受命者〕

周王→南・叔隹父（帰吳姫飴器）

〔賓①〕

自黄→南（璋一・馬両）

〔賓②〕

吳姫→？（帛束）

〔対揚〕

南（天子休）⇒ 作器者：南

周王の「令（命）」に対揚することを表す定型表現：

对〔王〕令…大保殷（4140）

对揚王休令…輔師夔殷（4286）

对王休令…中方鼎（2785）

对揚天子休令…善夫山鼎（2825）・申殷蓋（4267）・智殷（4321）

对揚天子丕顯休令…師晨鼎（2817）・休盤（10170）など

对揚天子丕顯殷休令…寰鼎（2819）など

对揚天子丕顯魯休令…百壺蓋（9728）など

ここまでのまとめ：

賓の事情について記す銘文では、

賓の主体（引用例では曩侯や侯）が「対揚」の対象となることはないらしい。